

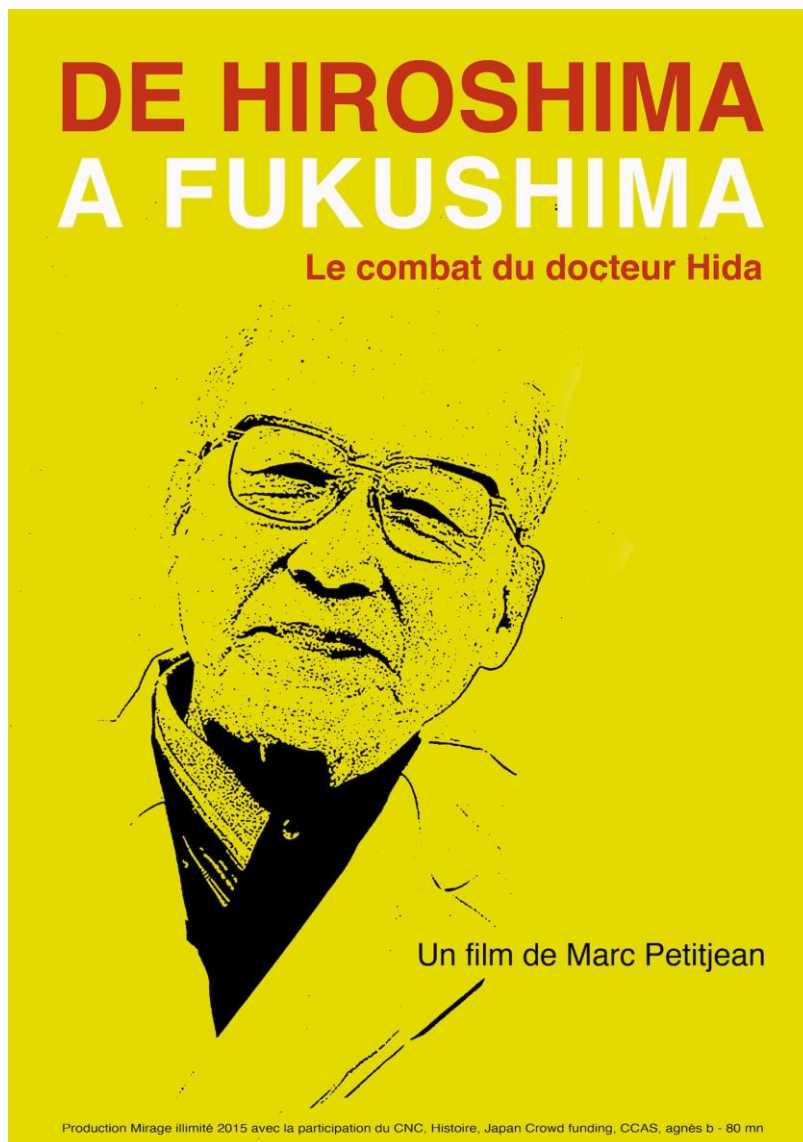
# ヒバクと健康 LETTER

肥田舜太郎追悼 臨時号 (No.5) 2017・4・20

低線量被曝と健康プロジェクト

ホームページ <http://hibakutokenkou.net/>

「LETTER No.5」をお届けします。2017年3月20日、被爆者で旧陸軍軍医、そして被爆者運動と内部被曝の告発に巨大な足跡を残された、肥田舜太郎さんが逝去されました。心からお悔やみ申し上げます。今号は、謹んで「追悼号」とさせていただきます。



\*目次\*

◆肥田舜太郎さんの2012年講演（著作未収録） 市民と科学者の内部被曝問題研究会第一回総会・シンポジウムにて 「自分が自分の命の本当の主人公になろう、放射線に負けないために…」	3
◆肥田舜太郎さんを偲ぶ	
市民と科学者の内部被曝問題研究会 理事長	沢田 昭二 8
琉球大学名誉教授・物性物理学	矢ヶ崎 克馬 9
仏ル・モンド紙が紹介報道	11
仏バーゼル大学ミッシェル・フェルネ名誉教授のメッセージ	13
4月25日にパリで肥田舜太郎追悼・映画と討論会	14
*故肥田舜太郎さんの通夜に参列して 田代真人	15

次号（No.6）は5月に発行予定です。

◆「LETTER」の内容について、ご意見は下記へお寄せください。

低線量被曝と健康プロジェクト代表 田代真人

〒325-0302 栃木県那須町高久丙407-997

Eメール：masa03to@gmail.com

スタッフ 小柴信子

hhg00102@nifty.com



◆「低線量被曝と健康プロジェクト」役員 ◆

顧問

益川敏英博士（2008年ノーベル物理学賞受賞、名古屋大学素粒子・宇宙起源研究機構長）

沢田昭二博士（名古屋大学名誉教授）

有馬理恵さん（劇団俳優座俳優）

西尾正道医師（北海道がんセンター名誉院長）

三宅敏文氏（会社経営）

代表 田代真人 幹事 石塚健、小林隆、曾根のぶひと、玉田文子、生井兵治、印南敏夫（監事）

専門委 小柴信子、寺門宏倫

（表紙の「肥田舜太郎ポスター」は、4月25日フランス・パリで催される、  
肥田俊太郎氏の追悼映画とシンポジウムの案内ポスター）

# 肥田舜太郎さんの記念講演

◆12年4月22日「市民と科学者の内部被曝問題研究会設立総会&シンポジウム」

## 自分が自分の命の本当の主人公になろう、放射線に負けない為に…

内部被曝問題研究会が発足しまして、おそらく世界で初めてだと思えます。

核兵器に関心を持っている、あるいは現在原発を動かしているどの国でも内部被曝の問題はほとんど知られていません。特に国民のみなさんには全く伏せられています。それはやはり放射能というものを利用して金を儲けようとする側にとっては、その被害が詳しく知られることは最もおそろしいことなのですね。だから全精力を上げて内部被曝は害がないということを今日まで地球上のすべての国でそう思い込むようにやってきました。

### 内部被曝を知る医者はいなかった

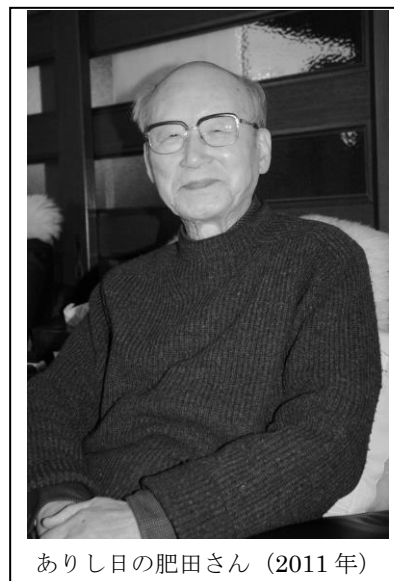
私は広島で軍医をしていて、まあ、自分も被曝をしたのですが、偶然命が助かって、そのかわりその瞬間から即死した人、倒れた人、焼き殺されたそういう人たちを、もういやというほど見てきました。

ですからあの爆弾が原爆ということが判って、その原爆が放射線を出すということが知るまでには少し時間がかかりましたけれども、基本は放射線が主力の殺人兵器だというふうに私は認識しています。そして67年間いまでもまだ私に相談しにくる被爆者がいますから、ほとんど後半生は全部被爆者の為に生きてきたといっても過言でない生活を送ってきました。

卓越した医者でもありませんし、学問的にもそれほど深いものを持っているわけでもない平凡な町医者です。研究はすることはできません、時間がなくて。でも、症例だけはたくさんもっています。

それをいま振り返ってみると、やはり他人が目で見てもああこの人は被曝をしたんだな、ケロイドがあったり、やけどをした跡が残っている。そういう人ももちろん大変な苦しみを味わったのですが、内部被曝を受けて外から見たのでは何の証拠もない、具合が悪くて医師にかかっても、日本の医師で内部被曝を知っている医師は当時ほとんどいませんでした。検査をしたり診察をしたりしても、彼らのもっている医学知識では、どこにも異常が認められない。必然的にあなたは病気ではないという言葉がでるんですね。医師は自分で学んできて検査の成績にせよ診断技術にせよ、どこかに異常があって、それが心臓なり、肝臓なり、腎臓なり、すい臓なりどこかの内臓の疾患に関係があるという判断ができない限り、病名がつけられない。

ですから、私のところに泣いて相談に来る大部分の人はどんな大きな病院に行って有名な先生に診てもらっても、あんたには病気は無いといわれます。「自分がこんなに苦しんで、まともには生きてい



ありし日の肥田さん（2011年）

けないほど身体が悪いのに何で医者が診たら病気じゃないといえるんですか」。そういつて怒ってきまず、みんな。

私はそういう患者ばかりを1960年ごろからずーっと診てきました。そしてできることは、本人を励まして長生きさせることだけです。その状態を治療するという方法が分からない。だから結局は、本人に健康を守るような生活の指導をして、「一緒に長生きしようね」という話しかできなかった。被団協という日本で唯一の被爆者の組織に加わりまして、たった一人の被曝医師でしたから、結局私がやった仕事は、20万、30万の生き残った被曝者の長生きを図るのが私の仕事、放射線のいたずらと抵抗して人間が健康を守って生き抜く、これがわたくしの任務だと思って、そういう仕事をしました。

## 放射線と闘って生きる勇気と覚悟を

ですからいま、日本中歩いているんな話を頼まれてしまいますが、みんながわたくしに要求するのは、「どうやったらこの子を長生きさせられますか」、「この女の子を結婚させて子どもを産めるでしょうか」、「わたしもまだ両親として長生きしていなければいけない、面倒みて長生きしなければ、どうやって生きていいのか」って、これがみんなの要求です。

だから、たくさんの専門家だという人がいうように、「事故を起こした発電所からできるだけ遠くへ行って、放射線のこないところに行きなさい」。あとは「水と食べ物を絶対に汚染されていないと確かめたものだけを食べなさい」。そういう指示をする。みなさんもテレビでそういうお話を聞かれたと思います。

でも、そののできる人が一体何人いるのだ。大部分の人はできません。できないことを教えるってしょうがないんですね。だからわたくしは、みんなにできることを教えます。それを言ってくれる医者だといって全国から来てくれ来てくれということで話がくる。それはわたくしが被爆者としてたくさんの被爆者仲間をガンや白血病に罹らないで寿命いっぱい長生きさせようという運動を何十万という被爆者と一緒やってきた経験があるからです。

結論からいえば自分の健康を守って自分の命を何よりも大事だと本当に思って、その命を損なわないようなそういう理想的な健康な生活を意識的に努力をしてやる以外にない。放射線との闘いはそれしきやないんだ。わたくしはたくさんの被爆者と30年、そういう運動をつづけた経験から確信をもってそういいます。ほかに名案はない。

それともう一つは、自分と自分の子どもだけが幸せになるという考えは、絶対に持つな。幸せになるならみんな同じ母親と同じ子どもが全部幸せになる道を考えろと。それには努力をして、日本中の原発を全部止める、それと世界中の核兵器をなくして日本の国がまたまた核戦争に利用されるようなことは絶対にしない。それには勇気をもってアメリカに帰ってくれということなんだと。そこまで突き詰めなければ、この原発問題は片付かないよ、という話をして歩きます。

これは思想でもなんでもない。いまある原子爆弾の放射能という余計なもの被害で苦しんでいる状態から抜け出そうと思えば、一番それを妨害しているアメリカさん帰ってもらうしかしょうがない。原発どころじゃない核兵器まで持ち込んでくるんだ。そんな手合いはもう67年も昔戦争が終わって、もうそのときに償いは十分我々はしてきた。明日からまだまだそんな奉公しなければならぬ義務は何にもないんだ。そういう覚悟が決まれば、あなたは放射能と闘って生きる勇気ができる。そういう話をしてきます。

## 一人ひとり違う内部被ばく

みなさんはもう、とっくにご承知だと思うけど直接外部被ばくを浴びる場合は、放射線の強さにやはり一定の条件がある。皮膚を貫いて中まで入るだけのそういう放射能の強さがなければ、外部被ばくも人間の身体に被害を与えることはできない。しかし内部被ばくの場合は、放射線の量や質の大小は無関係です。どんな少量でも入ったら最後、被ばく者なんだ。入った放射能はたくさんだから危ない、少量だから大丈夫なんていうのは全くないんですね。

アメリカは入った放射線が微量だから人間の身体には害を与えない。何の根拠もない嘘を原爆を落とした瞬間から日本にずーっと嘘をつき続けてきた。たくさんの人がそれに惑わされて、たくさんの方の大学教授が研究もしないで内部被ばくは量が少なければ安全だと、いまでもまだ思っています、みんな。

わたくしは広島の子が同じ所で同じ状態で被ばくをした人間が、片っ方は3日後に死に、今日まだ生きている。人によって違うのですよね、対応が。つまり放射線と人間の関係は、その放射線といま受けた人間の健康状態がその人の将来を決める。同じような状態で起こっても、みんな被害は違うのです。

それをたくさんわたくしは経験しているから、福島の人に何マイクロシーベルトで、どうのこうのといういろんな意見が出ている。全部同じようにあなたも隣の子もその向こうの子もお宅の子も同じ条件で被ばくをした。しかし、明日からこの子たちに起こってくる運命は一人ひとりみんな違うんだ。こっちは百まで長生きするかもしれない。こっちは悪いけれども高校生のときにガンがでるかもしれない。それは、その子の本人が持っている、そのときの被ばくしたときの健康状態によって違うんだと。

だから、基本は、放射線は身体に入ったけれども、その放射線が悪さをして、身体の中であっちこっちこう悪さをしながら、時間をかけて病気をつくっていく、それをつくらせないようにすれば、長生きできるんだ。日本の広島長崎の子は、みんなそうやって長生きしてきた。

だからあなた方もなんとなく生きているという生き方じゃなくて、明日から私は正しく生きるんだ、放射線には負けない、そう思って、メシの食いかたから、夜の寝かたから、トイレの行きかたから、セックス、何もかも自分が行う行為が度を過ぎないように、許された自然の健康を守る生活に慣れて、お酒も過ぎさない、煙草は今日かぎり止める、悪いといわれたことは全部やめる。そういう生活にあなとも、父ちゃんも、それを見倣って子どももしつける。そういう生活を明日からしなさい。それが嫌だったら、遠慮なく放射線に負けて死んでください。そういう話を歩きます。

そこまで言わないと、ただ放射線というものはこわいものです、どうのこうので、学者の先生が話すような話しをしても、いまのほんとに心底心配している母親の悩みは止まりません。

## ブラブラ病

被ばくというものが、こんなにおそろしいものだということは、まだみなさん本当のおそろしさは本当に出合っていない。放射線のおそろしさのいちばん深いところは、医者が見ても病気だとは思えない、しかし本人はからだが悪くて活動ができない。それを悩んで自殺をした被ばく者はたくさんいたし、会社を勤められなくなって、あいつは怠け者だといわれて、自分じゃ働く気が十分ありながら、あの爆弾を受けたからこんなになったんだと、誰に訴えても分かってもらえない。人間こんな苦しいことはないですよ。ほんとうに…。

72歳のときに、わたしのところへ訪ねてきた被ばく者がいます。22歳のときに広島で被爆をして数週間経ってブラブラ病がでました。だけど軽くて、何日か苦しんで治っちゃって、そのまんま何もなしに70何歳まで生きたんですね。中小企業の社長さんで、たくさんの人を使って、それが1980…何年、ちょうど原爆が落ちてから35年ぐらい経って急にブラブラ病がでたきた。毎日自分の工場を回ってね、5つあるんだそうです。そこへ行ってみんなを励まして段取りをつけるのが社長の役割。ところがそれが回れなくなった、かったるくて。

それで、新潟の人なのですが、農協の病院、日赤の病院、もうありとあらゆる先生に診てもらって、どこ行ってもなんともない。どうしても納得がいけないから、懇意になった医院長に紹介状を書かせて東大まで行った。ホテルをとって。で、3日待ってやっと診てもらって、それで何日か検査を受けて、そして何日になったら来なさいといわれて行ったら、「あなたには病気はありません」。「どうしてですか、わたしはこんな悪いんですけど」。「私がどんな人を診ても病気を見間違えることはありません」と言うんだそうです。「わたしはあなたを見てどこにも病気がない。誰に聞いてもらっても私がやった検査はまっとうだし、診断の結果はまちがいない。だからあなたは病気じゃありません」。

それで帰りに埼玉県のこういうところに行くと詳しい医者がいるというのを聞いてたもんだから、わざわざ僕のところに来てね、カンカンに怒るんですよ。「なんぼ偉い東大の先生か知らんが、世界中の人間の全部の病気が分かるわけなかるう。てめえが分かんないときは、分かんないって言えやいいじゃないか。何で病気がねえなんて言うんだ」ってね、カンカンに怒って、ぼくのところに来たんですよ。

「そりゃあその通りだ」と、「そりゃあそのお医者さんの考えは間違っている」。で、あんたの病気はこうこうこういう訳で「いまの医学ではどうしようもないし、どこが悪いこともいまの医学は分からない。治す方法もなければ、中に入った放射線をつまみ出す方法もない」「あんたが自力で、自分の意志で、命を守って闘って生きるしかないんだ」という話を2時間ぐらいしました。

それでやっと納得して帰ってね、それから毎月報告書よこします。先生に言われてからこういう生活している。だんだん、だんだんその症状が薄れてね。それで、結局最後はガンでなくなりましたけども、長いお付き合いをしました。

つまり、ブラブラ病というのは、まあ、ぼくらはブラブラ病という名前しか知りませんから、患者さんがつけたその名前を言うんですけど、これが福島にでるだろうと、わたくしはわるいけど推定しています。というのは、被ばくした放射線は広島・長崎とおんなじ。プルトニウム・ウラニウムを混ぜ合わせてたプルサーマルというのを使っている。だから広島と長崎の被ばく者が経験したことは、必ずこの人たちに起こってくるだろう。その時期はおおむね3年後が一番まとまった始まりだろうというふうに推定をしています。でも残念だけどもう始まっていますね、1年目に。何人ものお母さんが脱毛がはじまった。

放射線の疾患の特徴は、粘膜出血、高熱、それから口に中の口内炎、どんどん悪くなって腐ります。腐敗をするのです。それからやわらかい皮膚に紫色の斑点がでます。最後に頭の毛が抜ける。抜けるというより取れるんですね。当時の経験では、頭こうやると（手で頭をなでる動作）、その下の毛がスーッととれる。

私のところへもう4人、福島の相馬のご婦人から4人が先生の書いた本にある脱毛というのが、自分にはじまったみたいだというふうにくてます。だから、あと1年ぐらい経つと増えていくんじゃないかと心配しています。

心配する理由は、日本中の医者がいまどの医者も一人も内部被曝の症状をみたことがない、放射線

以外について何の知識ももっていない。これは政府の力でみんなに被ばく者を診て正しい指導のできるように急速に体制をつくらないと、医者も困るし、患者さんも気の毒な状態が起きます。そういう心構えも準備もいまの日本の中には何にもない。

### 自分の命の主人公は自分—被ばくに立ち向かい明るく生きる人間として

みなさん自身が、現地のお母さん方から明日からどうしたらいいんでしょうといわれたときに、おそらく自信もってこうやって生きれば大丈夫よというものは、みなさんもってないと思う。自分の努力で生きる以外手がないのですよ。放射能の被害は。

だから、自分が自分の命の本当の主人公になる。いま普通に生活していて、そんな思いもった人は誰もいない、朝起きて自然に生きているから生きている。でもそのとき思い直して、今日一日自分は放射線に負けないで生きぬくんだという意志をもって生きよう。この努力がわたくしは放射線と闘う、いちばん大事な要素だと経験上おもっています。もう時間がきました。

みなさんがこれからはさるいちばん大事なことは、子、孫、ひ孫のために日本のすべての原発を止めて、きれいにした日本を残すということがひとつ。

もうひとつはいま被ばくをして、いろいろ思い悩んで苦しんでいる人たちを励まして、元気に前を向いてね、明るく生きる道をいっしょに創ってあげることです。つまり被ばくした人は助けが欲しいんです。薬もだめ、医者もだめ、何もだめとなったら、やっぱり、背中をたたき、腰を支えてね、一緒に生きようという人をたくさんつくるなくちゃいけない。

それには、放射線に関心をもったみなさんが学んでそういう人間になっていただくほか方法がない？そう思って、わたくしは95歳でも負けないで毎日講演をして歩いています。

ですから、みなさんも今日、私のこの話を聞いた後はそういう立場で被ばく者に対して励ます人間として立ち向かってほしい。

そういうふうをお願いして、わたくしの話を終わります。

(この講演の文字化は、総会を中継して頂いたIWJのご厚意で中村氏によって行われたものです)

# 追悼

沢田 昭二

市民と科学者の内部被曝問題研究会 理事長  
低線量被曝と健康プロジェクト 顧問

原爆被爆者の医療と核兵器廃絶に指導的な役割を果たして来られた肥田舜太郎さんが去る3月20日100歳で逝去されました。

肥田さんは原爆が爆発した瞬間、広島爆心地から6キロメートル北の戸坂村(当時)の農家で子どもに注射しようとした時、原爆の閃光を浴び、火球がつくられ上昇して行く有様を目撃され、爆心地との間にある山を越えて迫ってきた爆風による黒雲が到達した瞬間に飛ばされ、こどもを抱えて潰れた家から表に出たそうです。

軍医中尉として勤務していた陸軍病院は爆心地から北 600 メートルの距離でほとんど全滅、僅かに残った人たちと戸坂分院をつくり、次々に死んでいく被爆者の救援と治療にあたられました。出産で松江にいた女性が一週間後、夫を捜しに広島に入って一週間くらい探し回り、ようやく肥田さんの戸坂分院で夫に再会できましたが、そこで倒れ、吐血と脱毛、皮下出血による紫斑など、直爆被爆者と同じ症状で 2、3 週後に死亡しました。残留放射線による入市被爆者の最初の経験でした。

柳井に移転した広島陸軍病院は、戦後、厚生省の国立柳井病院になり、そこで勤務の後、千葉県で国立国府台病院に転勤、全日本国立医療労働組合の設立にかかわれ、1949 年のレッドパージで国立病院を解雇されると、労働者や貧しい人のための診療所を作る運動に参加、西荻窪診療所や行田協立診療所を開設し所長を務められ、1953 年全日本民主医療機関連合会（民医連）の創立に参加されました。

肥田さんは 1955 年の第 1 回原水爆禁止世界大会で放射線障害の報告をされました。全日本民医連理事、埼玉民医連会長、埼玉協同病院院長、日本原水爆被害者団体協議会原爆被爆者中央相談所理事長を歴任され、1975 年以降、国連や欧米諸国を始め 37 ヶ国を遊説、核兵器廃絶を訴えてこられました。とくに米国では内部被曝について研究している科学者や医師と接触されて、彼らの論文を翻訳して、内部被曝の研究に先駆的な役割を果たされました。私は肥田さんに内部被曝の研究の基盤を与えていただきました。

2004 年 9 月、肥田さんは原爆症認定集団訴訟の大阪地裁の最初の証人として、実体験による真摯な被曝実態を話され、裁判官も感動、その後の原爆症認定訴訟の連戦連勝につながりました。近年では、市民と科学者の内部被曝問題研究会の総会などで会の顧問として感動的なお話をして下さいました。

肥田さんのご指導に心から感謝するとともに、謹んでご冥福をお祈りいたします。

## 肥田先生との出会い

矢ヶ崎克馬 琉球大学名誉教授

肥田先生と初めてお会いしたのは、2003 年、原爆症認定集団訴訟の決起集会が熊本で行われた時のことだ。それより少し前、私は熊本弁護士から集団訴訟のために内部被曝についての証言をしてくれと依頼されていた。

それにまつわる話が肥田先生との出会いを劇的なものにする舞台となっているので少しそのことについて述べなければならない。

「医師でも無ければ放射能の専門家でもない、物性物理学畑の私が 被爆者の原爆症の証言ができるはずはない！沖縄鳥島に撃ち込まれたことをきっかけに、劣化ウラン弾のことでは多少資料も集め分かり易い絵を描いて解説をし、国際会議にも招待されて反対運動をした経緯はあったけれど、原爆症の ことを論ずるには余りにも専門外だ。」これが熊本弁護団の要請を受け



たときの私の状態だった。

だが断るにしてもただでは断れない。「自分なりに納得もして断わろう」と、せめて『1986年線量評価体系』(DS86)の第6章だけでも読まなくては、と思って目を通し始めた。第6章が内部被曝の根源である放射性降下物の科学的評価をしている章だった。

読み始めるとほどなく、頭が燃え上がり目眩がするほどの衝撃を覚えた。「放射性降下物は身体に影響を与えるほど多くは無かった」という結論を出している環境評価のデータ、土壌の放射能測定、は全てあの巨大台風の枕崎台風の襲った後であったのである。

枕崎台風は1945年9月17日長崎を襲い広島をも襲った。長崎には大雨を降らし(8月からの3か月で1200mm)広島では太田川の橋を20本も流出させ爆心地一帯を床上1mの大洪水で洗い流した。

台風に襲われて辛うじて土壌に残留していた放射能を測らせたのである。測定結果を第6章などで扱い、それを「台風などの風雨の影響がなかった」としてDS86最初の項「総括」で“**健康へ影響を及ぼすような量ではない**”と結論付けているのである。

私は読んだとたん目眩ほどの衝撃を得、3日3晩眠れないほどの怒りを覚えた。

それには二つの理由がある。

先ずは、個人的な理由であるが、なぜ私は「ヒバクシャの原爆症を論ずるには物性物理学の私が出る幕はない」と長年決め込んできたのか！広島では床上1メートルの濁流に洗われた。その後で測定した土壌中に残留する放射能が被爆者の受けた放射能環境を保存するものでないことは医師や放射線の専門家でなければわからないような代物では全くない。判定に専門性を有するものでは全くない。

一般科学を認識するところ、市民が判断するところ、誠に当たり前の常識で喝破できる、現に初めて読んだ私が明瞭に事態を認識しているではないか。なぜ私は具体的にDS86等の被曝評価のバイブルと言われるこのえげつない書き物を読まずにいたのか！何という不明。もし私が10年前に読んでいたら被爆者の歴史が10年違っていたに違いない。何という不明を仕出かしたのか、ということであった。

2番目は、科学者専門家と言われる膨大な人がDS86等を承知している。なぜにそれらの「科学者・専門家」はこの単純で重大な虚偽を指摘し、批判してこなかったのか！科学者・専門家は科学の原理を適用していない。これが原子力ムラと言われる集団の実態なのか！というこの分野の科学者・専門家への不信である。科学者あるいは専門家と称して政治的軍事的支配を「科学的に」裏打ちしている集団がいる。まさに「天動説」を信じ込ませようとする巨大な力がある。

私はその時に初めてこの被曝評価の分野の構造を理解して、証言者になることを決意したのである。

その決起集会で私は発言し、上記のことと、内部被曝を外部被曝と同様な方法で評価したらものすごい過小評価になる、という話をした。

集会終了後、肥田先生が私を捕まえに来てくださった。満面の笑顔、輝く笑顔。偉丈夫な肥田先生が身体じゅうを笑顔にして私に近づいてこられた。

「あなたの言うとおりで。たくさんの被爆者、救援者が命をなくしたのはまさに内部被曝。あなたの説明を聞いて「放射性降下物は健康に影響するほどの量は無かった」という謎は全部氷解しました。」と言って、しっかり握手をしてくださった。

その後、肥田先生は先生が翻訳した「内部の敵」、「ペトカウ効果」、「沈黙の春」等々の文献や「ヒロシマの消滅した日」などの著書を数回に分けて我が家に送ってくれた。勿論私の学習のどれほど大きな糧となったのか計り知れない。

肥田先生と私はそんなに時間的に密に接触したことはない。しかし、内容的には実に充実したもので、先生の思いを十分すぎるほどいただいた者として感謝に堪えない。

余談だが、3. 11以後、肥田先生は何冊かの本を上梓された。内部被曝に関する記述として私がフォローできることはしなければならぬと考え、本全部の関係箇所をすべて吟味させていただき表現も具体化した。しかし残念ながらこのことは片思いに終わり実をむすばなかった。

肥田先生は多くの被爆者と接するうちに「内部被曝」の苛酷な健康影響に気付かれた。加害者である米軍が「被曝の科学」を牛耳る中で、他の医師や専門家が放射線以外のありきたりの疾病に還元しようとするところを、未知であるが、必ず放射能を原因とする何かがあるのだという信念を曲げることは無かった。

そのうえで、肥田先生は既に被曝してしまった被爆者が如何に免疫力を高めて健康を維持できるか、という現実の命の励ましを指導してくださった。

肥田舜太郎先生、本当にありがとうございました。

先生のご遺志を継ぎたいと思います。

安らかにお眠りください。

◆フランス「ルモンド紙」の紹介記事 2017年3月26日付

日本人医師 肥田舜太郎

二度にわたる核の惨害、1945年8月の広島爆撃と2011年3月の福島原発事故で生き残った医師、肥田舜太郎が3月20日、日本・川口市で死去した。享年100歳。

広島で被爆し被爆者の治療に当たり、後年の高齢をおして半世紀以上にわたり福島原子力発電所の被爆者を支援してきた、この細身の、だが情熱的な人物の運命ほど桁外れなものはない。広島での体験は公権力に対する彼の不信をかき立て、生涯にわたり情報の捏造を標的にし、核被害に支配する「掟（おきて）」を告発してきた。

1917年1月1日広島生まれ。岐阜の旧家の血を引き継ぐ肥田舜太郎は、建築家になることを望んでいた父の意に反し医学の道に進んだ。1942年に軍に招集され陸軍軍医学校での学業を終え、1944年広島陸軍病院に配属された。27歳だった。

#### 原因不明の病

原爆投下の前夜、児童の治療に当たるため緊急に外出した。そして8月6日朝、彼は市の中心から7キロの山々に囲まれた村にいた。「稲妻のような閃光がひらめき、次いで屋根が吹き飛ばされた。私は家から吹き飛ばされるような感覚を覚えた。私の目の下にある天井に穴が開くのを見たと思ったら、体が壁にたたきつけられた」と、彼は衝撃的かつ、時には恐怖を覚えさせる証言の中で語っている。この証言は映画監督マルク・プティジャンに語ったものだ（『広島から福島へ。核に隠された惨害との肥田博士のたたかい』。アルバン・ミシェル（社）、2015年）

肥田舜太郎は原爆投下に続く数週間、数カ月、数年の恐怖を語り続けてきた。彼は犠牲になった人々が苦しんだ原因不明の病を前にした医学の無力さや、1950年代初頭まで彼らが見棄てられていたことを振り返る。1946年、米国は原子爆弾による被害の調査に当たる委員会（原爆傷害調査委員会、ABCC）を設置した。

多くの被爆者が自然発生的に現れた。米軍の医師たちは彼らを調査し標本にしたが、治療もしなければ、彼らの調査結果を日本の医師たちに知らせることもしなかった。被爆者たちはモルモットだった。原爆投下の効果は国家秘密だった。彼らにとっては「他の日本人にとってのように、戦争は1945年8月15日に終わったのではなかった。彼らは数十年にわたり原爆が身体と精神にもたらす結果に苦しみ続けたのだ」とドクター肥田は語る。

1970年代初頭、彼は低線量被曝もがんやぶらぶら病の原因になることを明らかにした。

1948年に（日本）共産党に入党した彼は、最も貧しい人たちの世話に心を砕く医療生協の設立に参加した。その後の生涯を通して彼は被爆者の治療に専念し彼らの声に耳を傾け、日本全土と30数カ国で開いた会合を通じて、彼らの意識を覚醒させるために語り部となってきた。

人生のたそがれ時、彼は広島の被爆者に対する感情移入を福島の事故の被爆者たちに振り向けた。「私は数年後、広島と長崎と同じような病気が現れることに備えている。そんなことを気遣う必要はないというのは馬鹿げたことだ」「広島の一定の被爆者には原爆投下から十年後、二十年後に症状が現れている。（新たな）ページがめくられたと思われていた時にね」と彼はマルク・プティジャンに語っている。彼はまた、チェルノブイリ以来のさらに重大な核事故による避難者たちに信頼を寄せている。除染されたとされる地域への帰還について公権力が強く打ち出している安全の保障と避難者自身と彼らの子どもたちにとっての不安の双方を共有している彼らだとはいえ。

ドクター肥田はその証言によって被爆者の権利を認めさせることに全生涯を使った。「人権の第一は生存の権利だ」と彼は繰り返し語った。深く考えなければならぬメッセージだ。

フィリップ・ポンス

（ジャーナリスト・伴 安弘氏訳）

## Shuntaro Hida

### Médecin japonais

Le docteur Shuntaro Hida, qui a vécu deux catastrophes nucléaires, le bombardement sur Hiroshima, en août 1945, et l'accident nucléaire de Fukushima, en mars 2011, est mort, le 20 mars, à Kawaguchi, au Japon. Il venait d'avoir 100 ans.

Exceptionnelle destinée que celle de cet homme frêle et chaleureux, irradié à Hiroshima, qui soigna les victimes puis, en dépit de son grand âge, essaya, plus d'un demi-siècle plus tard, d'aider celles de la centrale de Fukushima. Son expérience à Hiroshima avait nourri chez lui une défiance -enracinée à l'égard des pouvoirs publics, et il resta toute sa vie à l'affût de la désinformation, -dénonçant l'omerta régnant sur les ravages de l'atome.

Né à Hiroshima le 1er janvier 1917, descendant d'une vieille famille du département de Gifu, Shuntaro Hida se lança dans les études de médecine contre la volonté de son père, qui souhaitait le voir devenir architecte. Incorporé dans l'armée en 1942, il termina ses études à l'école de médecine militaire. Puis, en 1944, il fut affecté à l'hôpital militaire d'Hiroshima. Il avait 27 ans.

Mal obscur

La veille du bombardement, il était parti en urgence pour soigner un enfant et, le matin du 6 août, il se trouvait dans ce village protégé par les montagnes -situé à 7 kilomètres de la ville. *" Il y eut un éclair fulgurant, puis, le toit a été balayé et je me suis senti voler à travers la maison. J'ai vu le plafond s'ouvrir sous mes yeux et j'ai été propulsé contre le mur "*, raconte-t-il dans un témoignage émouvant, terrifiant parfois, recueilli par le cinéaste Marc Petit-jean (*De Hiroshima à Fukushima. Le combat du Dr Hida face aux ravages dissimulés du nucléaire*, Albin Michel, 2015), qui lui a consacré également un documentaire en 2014 (*De Hiroshima à Fukushima. Portrait du Dr Hida*).

Shuntaro Hida racontait l'horreur des semaines, des mois et des années qui suivirent le bombardement. Il rappelait le désarroi des médecins devant le mal obscur dont souffraient les victimes, et l'abandon dont celles-ci furent l'objet jusqu'au début des années 1950 : en 1946, les Etats-Unis créèrent une commission d'évaluation des dégâts de la bombe atomique (Atomic Bomb Casualty Commission, ABCC).

Beaucoup de victimes s'y présentèrent spontanément. Les médecins militaires américains les examinaient et faisaient des prélèvements, mais ne les soignaient pas plus qu'ils ne communiquaient les résultats de leurs examens aux médecins japonais : les irradiés étaient des cobayes, et les effets de la bombe un secret d'Etat. Pour eux, *" la guerre ne s'est pas terminée le 15 août 1945 comme pour les autres Japonais*, rappelait le docteur Hida. *Ils ont continué pendant des décennies à souffrir des conséquences physiques et morales de la bombe atomique. "* Au début des années 1970, il établit que les radiations à faible intensité n'en étaient pas moins à l'origine de cancers et d'une fatigue chronique (*bura-bura*).

Inscrit au Parti communiste en 1948, il participa à la création de coopératives médicales prenant en

charge les plus démunis. Il passa le reste de sa vie à soigner, à être à l'écoute des victimes et à témoigner pour essayer d'éveiller les consciences par des conférences à travers le Japon et dans une trentaine de pays.

Au crépuscule de sa vie, il avait reporté son empathie pour les victimes d'Hiroshima sur celles de l'accident de Fukushima. " *Je me prépare à voir dans quelques années l'apparition de maladies comme à Hiroshima et à Nagasaki. C'est insensé de dire qu'il ne faut pas s'inquiéter*, disait-il à Marc Petitjean. *Pour certains irradiés à Hiroshima, les symptômes sont apparus dix ans, vingt ans après le bombardement, alors que l'on pensait que la page avait été tournée.* " Il essayait aussi de redonner confiance aux victimes évacuées du plus grave accident nucléaire depuis Tchernobyl, -souvent partagées entre les assurances martelées par les pouvoirs -publics et les craintes pour elles-mêmes et leurs enfants en re-tournant dans les régions supposées décontaminées.

Toute sa vie, le docteur Hida s'est employé par son témoignage à faire valoir les droits des victimes : " *Le premier des droits de l'homme, c'est le droit de vivre* ", répétait-il. Un message à méditer.

**Philippe Pons**

© Le Monde

◆杉田 くるみ (フランス・グルノーブル在住)

3月27日 6:47

肥田舜太郎先生の訃報に接し、バーゼル大学医学部名誉教授、ミッシェル・フェルネさんからのメッセージをフランス語と日本語の併記でシェアさせていただきます。

Chers amis,

Le départ du docteur Hida Syuntaro m'a profondément touché et rappelé notre rencontre en 2012 à Fukushima. J'ai en effet eu le privilège de le rencontrer lors d'une conférence en commun. La salle se comportait bien des victimes de l'irradiation qui exprimaient leurs souffrances et auxquelles il pouvait répondre, j'ai pu constater la confiance et le respect de la population traumatisée à son égard.

La perte d'un activiste et d'une personnalité de cette valeur me touche comme elle touche la population victime du désastre actuel de Fukushima.

Michel Fernex.

肥田舜太郎氏の訃報に接し、心からお悔やみ申し上げます。

2012年に福島で肥田先生にお会いしたことを思い起こしております。学会でお目にかかる光栄を得ました。会場には自分たちの背負う苦しみを伝える、放射能被曝の犠牲者の方々がおられました。肥田先生はその方達の苦痛に応えることができた方でした。私は心に深い傷を持つ人々が肥田先生に信頼と尊敬を持って接しておられるのを目の当たりに拝見することができました。

このような貴重な人物、活動家を失ったことは、現行の福島事故の被災者の皆さんにとってもそうであるように、私にとっても深い悲しみです。

ミッシェル・フェルネ

◆フランスで4月25日行われる肥田舜太郎氏追悼の映画と討論会の案内 (杉田くるみ氏の紹介)

# Hommage au Dr HIDA Shuntaro

## (1917-2017)

**Invitation à la projection au cinéma *Les 7 Parnassiens*  
Mardi 25 avril à 20h30**

« *De Hiroshima à Fukushima* » nous fait découvrir les conséquences du drame de Fukushima à travers le regard du docteur Hida, témoin essentiel de la bombe d'Hiroshima et médecin des irradiés pendant 60 ans. L'évocation de sa découverte du danger des radiations résiduelles après la bombe en 1945, entrent en résonance avec ce que vivent aujourd'hui les victimes de la centrale de Fukushima.

**Auteur – réalisateur : Marc Petitjean**

**Production : Mirage Illimité ; Année de production : 2015**

**Durée : 78 minutes**

ドクター肥田舜太郎に捧げる (1917-2017)

映画へのご招待 4月25日(火) 20時30分

「広島から福島へ」はドクター肥田の目を通じて、私たちに福島ドラマの結果についての発見をもたらしてくれる。

広島爆撃と60年にわたる被爆医師の重要な証言。

1945年の原爆投下後の残留放射能の危険についての発見についての言及と福島原発(事故の)犠牲者の今日

監督：マルク・プチジャン

製作：ミラージュ・イリミテ 2015年製作 78分 (この項 伴 安弘氏訳)

肥田さんは、私たちが311後立ち上げた「市民と科学者の内部被曝問題研究会」の恩人である。

冒頭の「会」創立総会での肥田さんの記念講演に付けた写真は、足しげく肥田宅に通っていたころ、ビキニ被災者の大石又七さんと訪問した際に撮った一枚である。当時、大石又七さんとの面談は初めてだったようだ。話は世界のことから日本のことまで、核、被曝を巡って大いに弾んだことを覚えている。

その肥田さんが2017年3月20日、100歳で亡くなられた。

ショックだった。

どうしても会って話したい事情もあったのだが、会えずじまいだった。

25日、通夜に赴くと、刻限30分も前についたのだが、すでに満員。第2式場だった。

合わせて400人以上が参列した、と聞いた。

式場前の、肥田さんの著作展示では、手前のよく目立つところに「市民と科学者の内部被曝問題研究会」立ち上げの際に出版した『内部被曝からいのちを守る一なぜいま内部被曝問題研究会を結成したのか』が置いてあった。その巻頭言を肥田さんは書いている。

その「終りに」には「内部被曝研究会は今でもいろんな職種の人が集まっていて、医師や弁護士や学者がいれば、肩書きも特殊な技術もない一般職の方々も居られると聞いている。それが心と力を合わせて放射線の内部被曝の被害と闘ってゆく方法や道すじを、話し合い、相談し合って、少しでも有効な方向を見つけ、発言し、啓蒙し、実践して、今まで人類が経験したことのない課題に立ち向かう出発点に立っている。何もかもが未知の新しい道を歩くのだから、みんな遠慮なく発言し、みんなで考え、一致したことを確実に行ってゆくことになる。」とある。

我々は、放射線、被曝問題では、政府や政府系学者・研究者らと大いに見解を異にする。

しかし、我々の声はその力に比例して大きくなることはなく、市民のところに届くのはほんの一部でしかない。あちらの声の方が、圧倒的に大きく、広く、厚いからだ。

しかし、我々は、広島・長崎から、ビキニから、チェルノブイリから、福島からたくさんの方のことを学んだ。大きく進歩した、と思う。ところが、あちらの言うことを聞くと、広島・長崎くらい、ほとんど変わらない。時間は止まったかのようだ。

原爆を投下した後、アメリカのマンハッタン計画副責任者のトーマス・フェアレル准将は9月6日「広島・長崎では、死ぬべきものは死んでしまい、9月上旬現在において、原爆放射能のために苦しんでいるものは皆無」と声明し、原子放射能が存在しえず、いま現になくなっていく人がいるとすれば、それは残留放射線によるものではない、と記者会見で述べた。内部被曝などない、というのだ。アメリカは51年まで日本を占領。核問題の研究他を一切禁止した。そして日本はアメリカの核の傘に入る。

我々は、肥田さんが残してくれた「言葉」を大事にしよう。今は力は小さいかもしれぬ。それを大事に育てよう。「未知の新しい道」を共に歩もう。

